

令和2年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第7号（4月予報）

令和3年3月23日 秋田県病害虫防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病害虫防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は4月を主とします。次回の発表予定は令和3年4月27日です。 ◇病害虫発生予察情報は秋田県病害虫防除所のホームページで閲覧できます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のホームページで確認してください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関に相談してください。最新の農薬登録状況の検索や、登録・失効農薬情報は独立行政法人農林水産消費安全技術センターのホームページで閲覧できます。 http://www.famic.go.jp/ ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのホームページで読者登録できます。 http://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	苗いもちはやや多いと予想されます。育苗施設近傍や施設内に稲わら・籾殻を置かず、種子消毒と育苗期いもち防除を必ず実施してください。育苗施設内の通風不良、日照不足、被覆期間の過剰、過繁茂、田植の遅延は発病を招くため、適正な育苗管理に努めてください。また、県内の採種ほ産種子以外を使用する場合は、種子消毒と育苗期いもち防除を確実に実施してください。
果 樹	りんごでは、腐らん病の発生が多いと予想されます。樹体検診を実施し、発病部位は適正に処理してください。モニリア病は県中央部・県南部でやや多いと予想されます。前年に発生があった園地では展葉期から薬剤防除を行ってください。黒星病はやや多いと予想されます。薬剤防除は展葉期から開始し、防除間隔が長くないようにしてください。 なしでは、黒星病の感染量は平年並と予想されますが、前年に発生があった園地ではE B I剤はスコア顆粒水和剤を2,000倍で使用してください。 りんご黒星病となし黒星病対策に使用するE B I剤やSDHI剤については、耐性菌対策のため必ず保護殺菌剤を加用し、使用回数にも注意してください。

II. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水 稲	苗いもち	全県	—	—	やや多い
	苗立枯病	全県	—	—	平年並
	ばか苗病	全県	—	—	やや少ない
	もみ枯細菌病	全県	—	—	平年並
	苗立枯細菌病	全県	—	—	平年並
	褐条病	全県	—	—	やや少ない
りんご	腐らん病	全県	—	多い	多い
	モニリア病 (葉ぐされ)	県北部	平年並	—	平年並
		県中央部・県南部	やや早い	—	やや多い
	黒星病	県北部	平年並	—	やや多い
		県中央部・県南部	やや早い	—	やや多い
	リンゴハダニ	全県	やや早い	平年並	平年並
ハマキムシ類	全県	やや早い	—	平年並	
な し (日本なし)	黒星病	県北部・県中央部	やや早い	—	平年並
	リンゴハダニ	県北部・県中央部	やや早い	平年並	平年並
ぶどう	黒とう病	県南部	やや早い	—	平年並

III. 発生予報と防除対策

A 水稲

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 苗いもち (苗の葉いもちを含む)	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、2月24日発表の3か月予報では、4月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、前年の穂いもちの発生量は多かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、自家採種せず、県内の採種は産種子を使用する。
- イ、育苗施設の近傍や施設内に稲わら・もみ殻を置かない。
- ウ、種子消毒を行う。種子消毒の注意事項は、「3. ばか苗病」を参照する。
- エ、育苗期いもち防除は、次のいずれかの方法で必ず実施し、育苗施設から本田への伝染・発病苗の持ち込みを防ぐ。

①ベンレート水和剤500倍液を箱当たり500mL又は1,000倍液を箱当たり1L、播種時～播種7日後頃にかん注する。

②ビームゾル500倍液を箱当たり500mL、緑化始期にかん注する。

オ、エ①の播種時処理は、種子消毒に使用するタフブロック又はエコホープDJの防除効果を低下させるため体系処理は行わない。

カ、ビームゾルは使用時期が遅れたり、低温時に使用すると葉先が黄化する薬害を生じる。

キ、本田の葉いもちを対象として床土混和处理又は播種時（覆土前）処理を行う箱施用剤は、苗いもち（苗の葉いもちを含む）に対する防除効果がないため、育苗期いもち防除（エの殺菌剤）を

必ず組み合わせる。

ク、県内でQ o I 剤（ストロビルリン系剤）に対する耐性菌が確認されているため、本剤は使用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 苗立枯病 (ピシウム菌)	—	平年並（前年より多い）
(リゾープス菌)	—	平年並（前年並）
	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、2月24日発表の3か月予報では、4月の気温はほぼ平年並と予報されている（ピシウム菌 / 土、リゾープス菌 / 土）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、育苗施設を清掃する。出芽器・育苗箱などは十分洗浄し、「ケミクロンG」などで消毒する。

イ、人工培土を使用する。

ウ、育苗期間の温度管理と水管理を適正に行う。

エ、次の薬剤で防除を行う。

使用時期	農薬名	使用量又は 希釈倍数	散布液量 (箱当たり)	病虫害					
				ピシウム菌	フザリウム菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤 ¹⁾	10～15g/箱	—	○					
	タチガレエースM粉剤	6～8g/箱	—	○	○				
	ナエファイン粉剤 ²⁾	6～8g/箱	—	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤 ¹⁾	4,000倍	500mL	○					
		8,000倍	1 L						
	ダコニール1000	500～1,000倍	500mL			○			
	ダコレート水和剤	400～600倍	500mL		○	○	○		
	タチガレエースM液剤	1,000倍	500mL	○	○				
		2,000倍	1 L						
	ナエファインフロアブル ²⁾	1,000倍	500mL	○	○	○			
		2,000倍	1 L						
	ヘッド顆粒水和剤 ^{1),3)}	500倍	500mL	○					
		1,000倍	1 L						
ベンレート水和剤	500倍	500mL				○			
	1,000倍	1 L							
ランマンフロアブル ¹⁾	1,000倍	500mL	○						
出芽後	タチガレエースM液剤	500倍	500mL	○	○				
		1,000倍							
	バリダシン液剤5	1,000倍						○	○
	ランマンフロアブル ^{1),4)}	1,000倍		○					

1) オラクル剤、ヘッド顆粒水和剤、ランマンフロアブルは、1成分でピシウム菌による苗立枯病を防除できる。

2) ナエファイン剤は1成分でピシウム菌、フザリウム菌及びリゾープス菌による苗立枯病を防除できる。

3) イネミズゾウムシ、イネドロオイムシとの同時防除が可能である。

4) 使用時期は緑化始期までとする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ばか苗病	—	やや少ない（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、2月24日発表の3か月予報では、4月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、前年の本田での発生量はやや少なかった（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、自家採種せず、県内の採種ほ産種子を使用する。

イ、種子予措をする予定の作業施設やその周辺を清掃し、伝染源となる稲わら、粃殻、米ぬか、粉じん等を除去する。

ウ、種子消毒を行う。種子消毒の防除効果は浸種水温10～15℃で高いため、水温10℃を確保できる4月上旬頃を目安に浸種を開始する。

エ、高濃度短時間浸漬及び低濃度長時間浸漬では、防除効果を高めるために薬液の温度は10～15℃になるように努める。消毒効果の安定・向上を図るため、浸種開始後2日間は水のかけ流し、循環や交換をしない。

オ、塗沫法及び湿粉衣法による消毒種子又は、消毒剤吹き付け・塗沫済み種子では、種子表面に付着した薬剤が浸種後に水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高くなった状態で消毒効果を発揮する。そのため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。

カ、複数の品種や来歴、防除方法の異なる種子を同じ容器で同時に浸種・催芽をしない。また、品種や防除方法が変わるごとに容器を十分に洗浄する。

キ、消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシート等に置かない。消毒後の種子を載せるパレットやシート等は十分に洗浄した清潔なものを用いる。

ク、周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、浸種・催芽時は容器に蓋をする。

ケ、浸種時の水量は、種子1kgに対し水約3.5Lとし、水温は10～15℃になるように努める。水温が低い場合はお湯で調整する。浸種は水道水、井戸水を用いて水槽で行い、河川や湖沼の水は使用しない。

コ、浸種期間は浸種水温10℃で6～8日、14℃で6日程度とし、安定した薬効を確保するために、水交換は2～3回とする。

サ、催芽は30～32℃で行う。

シ、循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。

ス、出芽までの温度が低いと発病が多くなりやすいため、被覆資材等による保温に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. もみ枯細菌病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、2月24日発表の3か月予報では、4月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、育苗施設を清掃する。出芽器・育苗箱などは十分洗浄し、「ケミクロンG」などで消毒する。

イ、循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。

ウ、所定の播種量を守り、厚播きはしない。

- エ、出芽温度は32℃を超えないようにし、被覆期間を過剰に長くしない。また、出芽後の再被覆は行わない。
- オ、緑化期以降はハウスの開閉をこまめに行い、25℃以上にならないようにする。また、通風を良くし、過湿にしない。
- カ、過湿にならないよう、かん水は午前中に行う。
- キ、種子消毒は細菌病に効果のある薬剤を使用し、「3. ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 苗立枯細菌病	—	平年並（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、2月24日発表の3か月予報では、4月の気温はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、「4. もみ枯細菌病」を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 褐条病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、近年の発生量はやや少なく推移している（ /—）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。

イ、出芽温度が30℃を超えないようにする。

ウ、緑化期以降は通風を良くし高温、過湿にならないようにする。

エ、種子消毒は細菌病に効果のある薬剤を使用し、「3. ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

B りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 腐らん病	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、3月1～3半旬の巡回調査における発病樹率は2.6%（平年1.3%）、発病地点率は27.3%（平年18.2%）でいずれも高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、雪害を受けた部位は早めに整形し、伐採した枝は園内に放置せず焼却する。

イ、樹体検診を実施し、早期発見と適正な処置に努める。

ウ、泥巻きは、病患部を削り取り、水を加えて団子状にした草つき土で覆い、ビニール等を巻く。

- 1年後には取り除いて治癒状況を確認し、治癒していない場合には再度行う。
- エ、雪害の整形部及び剪定後の切口にはトップジンMペースト又はバッチレート塗布する。
- オ、枝腐らんを剪去した後の切口及び病斑の削り取り後（健全部を含め紡すい状に大きく削る）にはトップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。なお、剪去した枝、削り屑は放置せず焼却するか園外に搬出する。
- カ、トップジンMオイルペーストは成木の胴腐らんの削り取り後のみに使用し、剪定及び枝腐らん剪去後の切口には使用しない（薬害防止）。
- キ、発芽前に石灰硫黄合剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. モニリア病 (葉ぐされ)	県北部：平年並（－） 県中央部・県南部： やや早い（－）	県北部：平年並（前年並） 県中央部・県南部： やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている（ /±）。
- イ、3月22日現在、かづの果樹センター（鹿角市）におけるふじの予測発芽日は4月12日（平年4月11日）で平年並である（± / ）。
- ウ、3月22日現在、果樹試験場（横手市）における予測消雪日は4月8日（平年4月3日）で5日遅く、ふじの予測発芽日は4月3日（平年4月7日）で4日早い（－ / +）。
- エ、前年の実ぐされ発病果そう率は県北部では0.2%（平年0.2%）で平年並（ /±）、県中央部・県南部では0.1%（平年0.0%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ひこばえは伝染源となるため剪去する。
- イ、葉ぐされは見つけ次第摘み取り、焼却するか土中に埋める。
- ウ、例年、発病の見られる園地では、展葉期頃にオルフィンフロアブル、カナメフロアブル、ストライド顆粒水和剤、デランフロアブル、ネクスターフロアブル、パスポート顆粒水和剤、フルーツセイバー、ベフラン液剤25のいずれかを散布する。
- エ、発生が少ない場合は、開花直前にアンビルフロアブル、インダーフロアブル、オンリーワンフロアブル、サンリット水和剤、ネクスターフロアブル、フルーツセイバーのいずれかを散布する。
- オ、発生が多い場合は、発生盛期（開花1週間前～開花直前）にトップジンM水和剤を散布する。
なお、展着剤ニーズを加用すると効果が高くなる。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 黒星病	県北部：平年並（－） 県中央部・県南部： やや早い（－）	県北部：やや多い（－） 県中央部・県南部： やや多い（－）

(1) 予報の根拠

- ア、2月24日発表の3か月予報では、4月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。
- イ、3月22日現在、かづの果樹センター（鹿角市）におけるふじの予測発芽日は4月12日（平年4

月11日)で平年並である(±/)。

ウ、3月22日現在、果樹試験場(横手市)におけるふじの予測発芽日は4月3日(平年4月7日)で4日早い(-/)。

エ、前年9月の新梢発病率は県北部では16.3%(平年8.0%)でやや高く(/+)、県中央部・県南部では0.2%(平年0.0%)で高かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、展葉期の防除は発芽10日後頃を目安とするが、果樹試験場のウェブサイトにて情報提供される子のう胞子の飛散情報や気象情報等を参考にする。薬剤はベフラン液剤25とする。

イ、展葉10日後の薬剤はストライド顆粒水和剤又はパスポート顆粒水和剤とする。

ウ、開花直前と落花直後の薬剤は過去2年間の発生状況に応じて以下のとおり選択する。

①過去2年間に発生がなかった園地では、開花直前と落花直後にE B I剤(アンビルフロアブル等)を使用できる。E B I剤を使用する場合は、耐性菌出現を回避するため、使用回数は年2回以内とし、必ず保護殺菌剤(チオノックフロアブル、ジマンダイセン水和剤等)を加用するか、これらの混合剤を使用する。

②過去2年間に発生があった園地では、開花直前にS D H I剤(カナメフロアブル等)、落花直後にユニックス顆粒水和剤47を選択する。S D H I剤やユニックス顆粒水和剤47を使用する場合は、耐性菌出現を回避するため、必ず保護殺菌剤(チオノックフロアブル、ジマンダイセン水和剤等)を加用する。

エ、開花期前後の散布間隔は10日以内とし、散布予定日に降雨が予想される場合は降雨前に散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4. リンゴハダニ	やや早い(-)	平年並(-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(-/)。

イ、3月1～3半旬の巡回調査における越冬卵の寄生短果枝率は0%(平年0.2%)、寄生地点率は0%(平年1.4%)でいずれも平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、芽出し前にスプレーオイル、トモノールS、ハーベストオイルのいずれかを50倍液で散布する。

イ、芽出し前の防除ができなかった場合は、展葉期までに上記アの3剤のいずれかを100倍液で散布する。

ウ、前年に発生がなく越冬卵も確認されなかった園地ではア、イを省略してもよい。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. ハマキムシ類	やや早い(-)	平年並(-)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(-/)。

イ、前年9月の被害新梢率は0%(平年0%)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、芽出し10日後にエルサン水和剤40を散布するが、前年の発生が極めて少なかった園地では省略してもよい。
- イ、開花直前又は落花直後に I G R 剤、 B T 剤、サムコルフロアブル10、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。訪花昆虫保護のため、開花1週間前～落花直後やミツバチ設置期間は上記以外の殺虫剤は散布しない。

C なし（日本なし）

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
1. 黒星病	やや早い（－）	平年並（－）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量は平年並か多いと予報されている（－/+）。
- イ、前年9月中旬の果そう葉の発病葉率はやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、落葉は一次伝染源となるため、園内に残っている場合は、発芽前までに集めて土中深く埋めるなど適切に処理する。
- イ、芽りん片から芽基部への感染防止のため、発芽直前にアルタベールフロアブル60倍又は石灰硫黄合剤10倍液を散布する。
- ウ、落葉からの感染防止のため、発芽2週間後にチオノックフロアブル500倍、トレノックフロアブル500倍、ベルコート水和剤1,000倍液のいずれかを散布する。カナメフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバーといった S D H I 剤を使用する場合は、年間の総使用回数は2回以内とし、保護殺菌剤（チオノックフロアブル、トレノックフロアブル、ベルコート水和剤等）を加用する。
- エ、前年に黒星病の発生した園地では、開花直前の E B I 剤はスコア顆粒水和剤を2,000倍で使用する。
- オ、農薬の総使用回数は、前年の収穫後からカウントされるため、秋期防除実施園では注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. リンゴハダニ	やや早い（－）	平年並（－）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（－/ ）。
- イ、3月上旬の巡回調査における越冬卵の寄生短果枝率は0%（平年0.1%）、寄生地点率は0%（平年1.8%）でいずれも平年並であった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、前年秋期に発生が見られた園地や越冬卵が見られる園地では、発芽前にアルタベールフロアブル40倍又はハーベストオイル50倍液を散布する。

D ぶどう

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1. 黒とう病	やや早い (－)	平年並 (－)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されていることから、ぶどうの生態は早いと見込まれる (－ /)。

イ、前年7月の発生量は平年並であった (/ ±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源となる前年の被害枝(結果母枝)や巻きひげは切り取って処分する。

イ、前年に発生が見られた園地では、発芽前にデランフロアブル200倍、パスポート顆粒水和剤250倍、ベフラン液剤25 250倍、ベンレート水和剤200倍、ベンレートT水和剤20 200倍液のいずれかを散布する。

ウ、シャインマスカットなどの欧州系品種やスチューベンは発生が多いため、休眠期の防除を徹底する。特に、苗木の植え付け当年は新梢の被害が大きくなりやすいので注意する。

IV. 気象予報

令和3年3月18日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（3月20日～4月19日）

（1）予報のポイント

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。

期間のはじめに低気圧の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

（2）向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
平均気温	10%	20%	70%
降水量	20%	40%	40%
日照時間	30%	40%	30%

（3）気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

	低い	平年並	高い
3/20～3/26	10%	10%	80%
3/27～4/2	10%	20%	70%
4/3～4/16	20%	40%	40%

令和3年2月24日仙台管区气象台発表 東北地方3か月予報（3月～5月）

（1）月別の天候【4月】

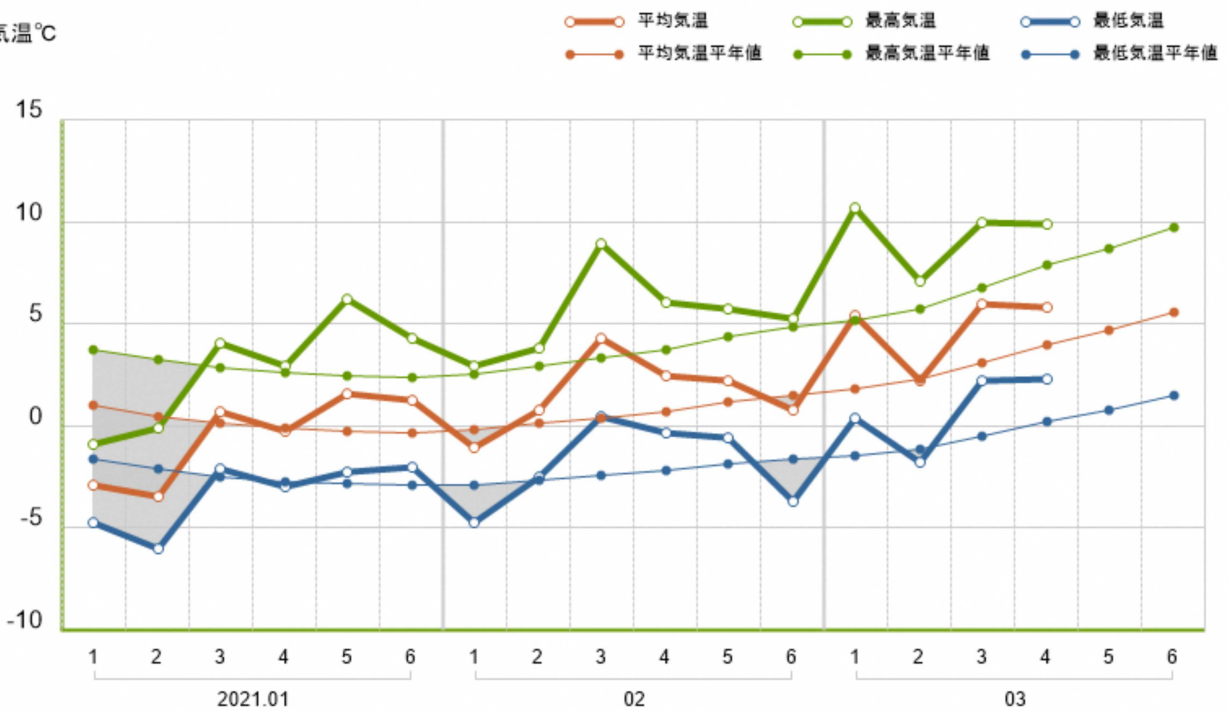
高気圧と低気圧が交互に通り、東北日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。気温と降水量はほぼ平年並でしょう。

（2）3か月予報【4月】の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率

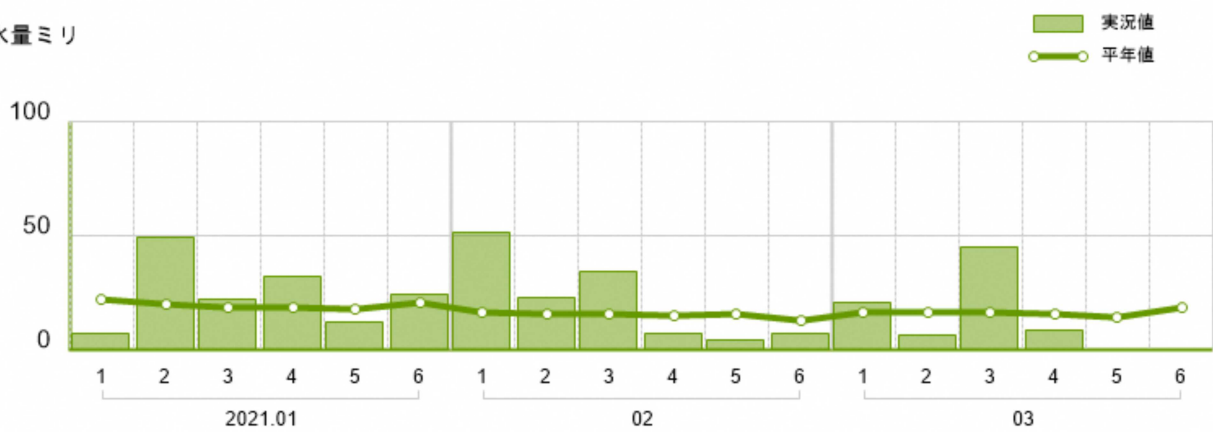
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
平均気温	30%	30%	40%
降水量	30%	40%	30%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～3月4半旬 秋田県農業気象システムより)

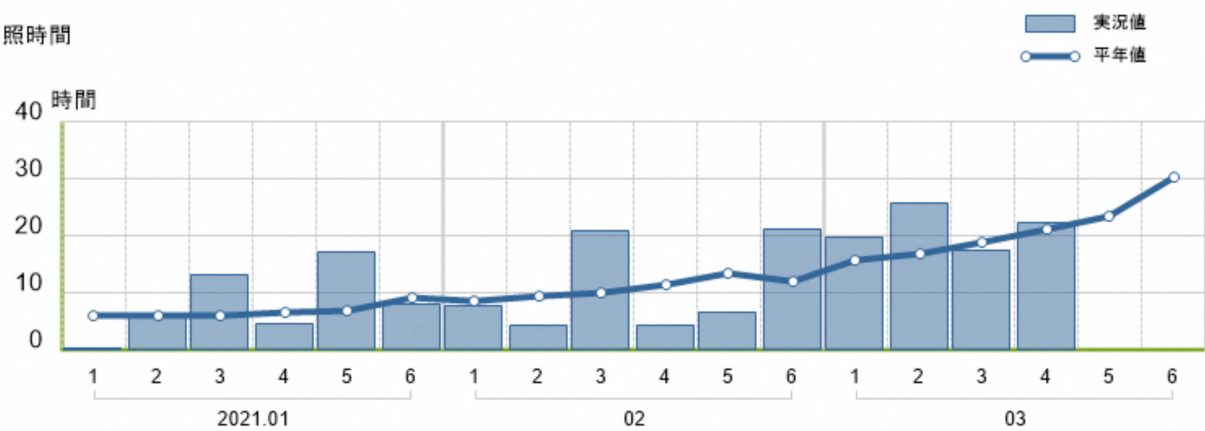
気温℃



降水量ミリ



日照時間



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

平年値 ↓						
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合の注意

水稲育苗終了後に野菜類・花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬がハウス内土壌に浸透しないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で散布してください。

詳細は、令和3年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

○安全使用の基本事項

- ・農薬の使用基準を遵守する。
- ・病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
- ・防除履歴を必ず記録する。

○農薬使用上の注意

- ・農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させない。
- ・家畜・蜜蜂等に影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類等を散布前に十分周知する。
- ・農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
- ・特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
- ・農薬散布時の装備と体調は万全にする。

○農薬の取扱い上の注意

- ・農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
- ・農薬を他の容器（清涼飲料水の容器等）へ移し替えない。